

氏名(本籍)	なか はら あつ のり 中原篤徳(東京都)
学位の種類	博士(芸術学)
学位記番号	博甲第4126号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	彫刻家 後藤良論

主査	筑波大学教授	博士(芸術学)	守屋正彦
副査	筑波大学教授	芸術学修士	柴田良貴
副査	筑波大学教授	博士(芸術学)	齋藤泰嘉
副査	崇城大学教授	Dr. phil.	中山典夫

論文の内容の要旨

本論文は、能の彫刻いわゆる能彫を中心に制作を行った後藤良（ごとうなおし／明治15年・1882～昭和31年・1956）とその彫刻作品について論じている。後藤の作品に関する先行研究も皆無に近く、後藤を再評価する試みも今までなされてこなかった。著者は、後藤良の事績を収録した亀谷了著の回想録『目黒不動仁王尊の出来るまで』を参観しながら研究を進め、戦前、戦後の評論等から後藤の彫刻について考察し、筑波大学芸術学系収蔵予定の作品や著者蔵の作品を丹念に見ていくことにより、後藤の彫刻の造形的な特徴を探り、これを通して、後藤の彫刻を日本の近代彫刻の中に位置付けることを目的としている。

第1章では後藤良について論じ、後藤の父であり近代日本における最初期の彫刻家である後藤貞行について考え、後藤が父から受け継いだ制作への執着心や彫刻制作に写真を用いる方法などを明らかにしている。また、後藤の生涯を作品とともに振り返り、戦前、戦後を通じての能美会、能彫会を主催することによって、彫刻家に能を見る機会を与え、能彫を彫刻の一分野として確立したと捉えている。また、東京美術学校校長正木直彦（文久2年・1862～昭和15年・1940）の日記『十三松堂日記』や生前の後藤を知る外孫の安原喜孝や彫刻家・佐藤静司らによる話及び諸資料から後藤の人間像について考察している。

第2章では、後藤が主として制作した能彫を理解するために、「能彫」を定義し、能そのものについて考察した。「能彫」という語が、明治期に月岡耕漁によって確立された能姿を描いた「能画」から影響を受けつつ、後藤が創作したと推測し、これを踏まえて、能についての歴史、能の概念、能の実際の様子や曲目について論じ、後藤による能の造形、例えば能の型（ポーズ）、能の空間、能面や装束の造形について、彫刻のモチーフとして採用した理由について考察している。また、後藤の能彫に対する高村光太郎の批判を取り上げ、彫刻的な能をさらに彫刻にするのは「再藝術」であるとした高村の認識について考え、本質的なものを抽出して彫刻にするという高村の制作態度と後藤の考えに大きな差はないと結論づけている。

第3章では、「星取り法」について具体的に述べ、後藤の木彫制作の過程を考察し、次いで、後藤の作品である能彫「葵上」「巻絹」を取り上げ、石膏原型と比較しながら木彫作品の造形的特徴について考察し、彩色方法については、後藤が一時継承した越前出目家（面打の名門）の伝書等から伝統的な彩色を応用したことを明らかにし、石膏原型から木彫に転換する「星取り法」によって塑造で吟味した造形を木彫において

可能にしたことにより、後藤の能彫が充実した形態を獲得したと位置づけている。

第4章では官展出品作品の分析を行い、作品発表当時の評論も合わせて分析している。第1節では第9回文展（大正4年・1915）～第7回帝展（大正15年・1926）、第2節では第8回帝展（昭和2年・1927）～昭和11年文展招待展（昭和11年・1936）、第3節では第1回新文展（昭和12年・1937）～第6回日展（昭和25年・1950）、第4節では、第7回日展（昭和26年・1951）～第12回日展（昭和31年・1956）までの出品作品について考察し、それぞれの時期において、東洋趣味や日本の仏教彫刻、ギリシア・ローマ彫刻、ブールデルなどの影響を受けつつ、新しい彫刻への試みが為されて来たと解釈した。

第5章では、近年改めて確認された石膏原型31点（筑波大学収蔵予定29点）を実際に見ることにより、塑造による原型制作の意味について考察している。それらを概観して、後藤の古典研究の成果が見出され、写実的な造形を超えて、面を折り曲げることによって出来る緊張感のある線や、柔らかな面で装束を構成し、抽象的な形態感を獲得していることを指摘している。

結びにおいて、後藤の能彫が人体の基本的な形態を重視しながら、装束などを抽象的ともいえる形態にまで突き詰めたと見、金剛流宗家金剛巖が「能としての理想」と評した能の象徴性や精神性を希求したものと捉えている。著者は後藤の能彫が写実的な肉体表現を主とする西欧的なアプローチからだけではなく、装束から抽出された線と面から立体を構成していく造形の仕方を用いることにより、近代彫刻において日本的な彫刻の量を作り出したものと位置付けている。

審査の結果の要旨

西洋の古典的なギリシア・ローマの彫刻、その理想美に従う美術教育からはじまったわが国では、近代彫刻のあり方が当初から人体の理想美や量塊を制作の主眼とし、そのために後藤良の「能彫」作品は高村光太郎が批判した「再芸術」の名のとおり、評価の埒外に置かれ、先行の研究や再評価がまったく行われてこなかった。著者は自身が人体像を日展において発表する作家であることから、後藤良の「能彫」といわれる木彫作品に興味を持ち、それが近代彫刻においていかなる意味を為しえたのかを論じている。

第1章では「能彫」を為すまでにいたる後藤良の生い立ちから、生涯を振り返り、父である彫刻家後藤貞行の教えや、東京美術学校長の正木直彦との親交、彼からの日本の古典芸術についての教えなど、周囲からの影響をとおして後藤良の人間像を解釈している。論文は、作家論の形態をとり、とくに文献ばかりでなく、作家の生前を知る関係者からの示教を得て、より詳細な作家像を捉えている。

第2章では後藤が「能彫」とした作品に対して「再芸術」と批判した高村光太郎の近代彫刻に対する認識と後藤良の制作姿勢について論じ、彼らの時代認識から離れ、今日的彫刻観に立って著者は「本質的なものを抽出し彫刻する」両者の態度に大きな差がないことを文献と彫刻家の視点から考証している。

さらに第3章では後藤の「能彫」を完成させるまでの姿勢が、石膏原型を基にした星取り法によって行われ、また刀痕が従来の木彫家に見られない新たな効果を示し、さらに伝統的な面打ちの彩色法を彫刻に応用するなどの、後藤における「能彫」制作について技法論的な解釈から彼の制作のあり方を論じている。

著者は第4章においてはじめて後藤良の生涯の出品について論じているが、その過程で明らかな出品の写真等を比較して、ギリシア・ローマ彫刻、ブールデルなどの近代彫刻にも影響されている作品事例を紹介し、あわせて東洋趣味や日本の仏教彫刻などの制作を通して、後藤良がそれらを経て後に「能彫」に至った背景を考察している。第5章ではとくにその実例としての石膏原型を確認し、後藤における「能彫」を作品とする意味、わが国近代彫刻に果たした意義について解釈している。このような経緯を確認し、能の持つ静止的な姿を得て、後藤が日本的な彫刻のあり方をその量塊において生み出したことを評価している。

従来の先行研究では位置づけがまったく不十分であった後藤良の彫刻を取り上げ、これまでの日本の近代

彫刻のあり方を概観しつつ、近代によって失われた感のあるわが国の伝統的な彫刻のありかたについて論じている。木彫表現について、著者自身もまた彫刻家としての視点を持ち、独自の新知見を持った解釈を為したこと。さらにこのことによって近代彫刻史研究に新たな視点を持ち込み、新たな作家論を構築できたことは大いに評価すべきものとする。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものとする。